

長岡京右京二条四坊一町 現地説明会資料



門跡（東から）

2003年6月21日
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

調査地 京都市西京区大原野石見町地内
調査期間 2003年5月13日～継続中
調査面積 約1,000m²

1 調査経過と周辺の歴史的環境

今回の発掘調査は、京都市建設局街路建設課による道路（石見下海印寺線・伏見向日町線）の敷設に先だって実施しました。調査地は、低位段丘の北に広がる標高約40mの平地に立地しています。

調査地の周辺は、縄文時代から平安時代の遺跡が重なる上里遺跡に含まれています。前回に実施した伏見向日町線の調査でも縄文時代晩期の甕棺墓や古墳時代中期の竪穴住居跡などを多数発見しました。また、南の低位段丘上には全長約37mの前方後円墳である井ノ内車塚古墳や芝古墳群が築かれています。

延暦3年（784）に長岡京遷都が行なわれると、この地域も右京北西部として条坊が施行されたと考えられます。調査地は長岡京の条坊では右京二条四坊一町で、一条大路と西三坊大路の交差点の南西部にあたります。先の伏見向日町線の調査では一条大路の南側溝を発見していたため、当調査地では西三坊大路の発見が期待できました。

2 調査の概要

発掘調査は初めに北西部の約100m²を1区として行ない、すでに調査を終えています。1区で検出した主な遺構は、中世の溝や柵列、時期不明の建物1棟、古墳時代の竪穴住居跡2棟などです。今調査を行なっているのは2・3区で、合計約900m²が対象となっています。現在までに長岡京期の遺構の調査を終了しています。以下に2・3区で発見した長岡京期の遺構について簡単に述べます。

西三坊大路西側溝 調査区中央で南北約35mにわたって幅約2mの溝を検出しました。位置的に長岡京西三坊大路の西側溝に相当すると考えられ、この溝の東の空閑地が路面ということになります。深さは浅いところで15cm、深いところで30cm残っており、底の標高差から南から北へ流れていたことがわかります。また、後で述べる門跡の前では幅0.8mと狭まっていた。恐らく、この部分に橋が架けられていたと考えられます。なお、南端部は東西方向の宅地区画溝と合流し、東肩に沿う幅0.2～0.3mの細い溝となって南方に消えています。南の段丘上にも続いているかどうかは今後の課題です。

宅地区画溝 調査区南で西三坊大路西側溝と合流する幅1.5mの東西溝です。伏見向日町線の調査で発見した一条大路南側溝から約60m（200尺）南の地点にあたります。深さは10cmと浅い溝ですが、雨期にはかなり多くの水が西から流れたようで、西三坊大路西側溝との合流点で路面側に水が溢れ、路面を侵食氾濫した痕跡が認められます。この合流点では多くの遺物が出土しています。

内溝 西三坊大路西側溝と平行して南北に延びる幅2.5～3mの溝です。東肩と西三坊大路西側溝西肩の距離は約2.5mで、この間に築地が設けられていたと考えられます。深さは約20cmで、南端は門跡の北柱筋に対応して途切れています。この溝からは長岡京期の土器片が比較的多く出土しています。

門跡 西三坊大路西側溝の幅が狭くなった地点で、南北に並ぶ大きな柱穴を発見しました。位置的に門跡と考えられ、棟門として復原できます。柱掘形は南北約1m、東西約0.7mで、少なくとも2時期の建替えが行なわれています。古い段階は掘立柱構造で、柱間は約3.6mです。建替えの時に柱を抜き取った痕跡が認められます。新しい段階は柱痕跡は確認できませんが柱間4mと大きくなり、親柱の東西にそれぞれ支柱が付けられました。支柱の柱間は東（外側）で1.5m、西（内側）で1.65mです。内溝の存在から門の南北には築地が取り付いたと考えられます。なお、門の中心は一条大路南側溝から南へ45m（150尺）、宅地区画溝から北へ15m（50尺）と計画的に配置されています。

掘立柱建物 宅地区画溝の南で発見した東西棟の建物です。南北2間（4m）、東西3間（6m）以上で、東から2間目に間仕切りの柱をもっており、西は調査区外に延びています。東側柱列が門跡から延びると推定している築地ラインとほぼ一致しており、築地がここまで延びず宅地区画溝で止まっていたことを示唆しています。

方形区画溝群 門跡の南西部、西三坊大路西側溝と宅地区画溝に囲まれた場所で、南北約10.5mの方形に区画された溝群を発見しています。中を2条の東西溝で3つの小区画に分割し、南東隅で西三坊大路西側溝に排水しています。東限の溝と西三坊大路西側溝の西肩の距離は約2.5mで北側の内溝と共通しており、門跡から南に築地が延びていたことを示唆しています。北限溝は門跡の南柱筋と一致しており、築地内溝の南端部との間が門跡から宅地内に入った東西通路として機能していたと考えられます。

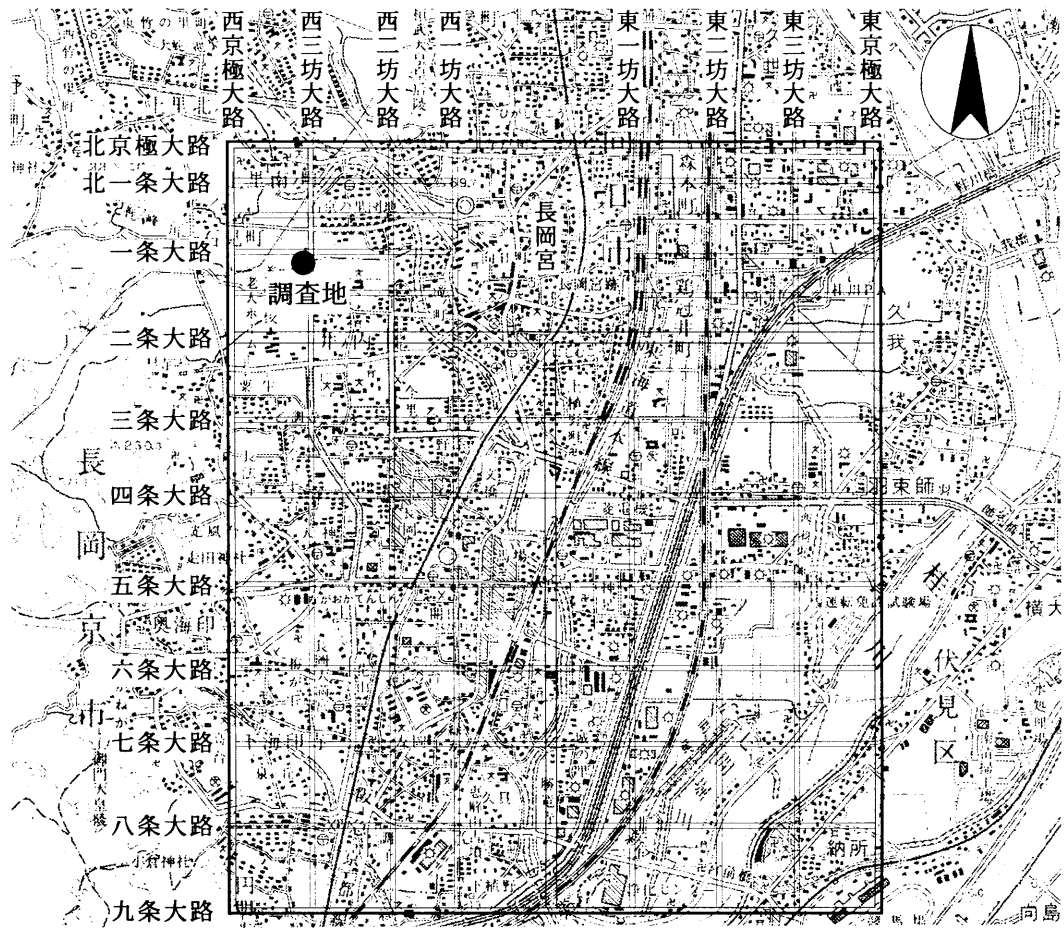
3 出土遺物

西三坊大路西側溝や築地内溝・宅地区画溝などから、土師器・須恵器などの遺物が出土しています。とくに出土量が多いのは、西三坊大路西側溝と宅地区画溝の合流点で、ここからは小型の壺や土馬の破片も出土しています。

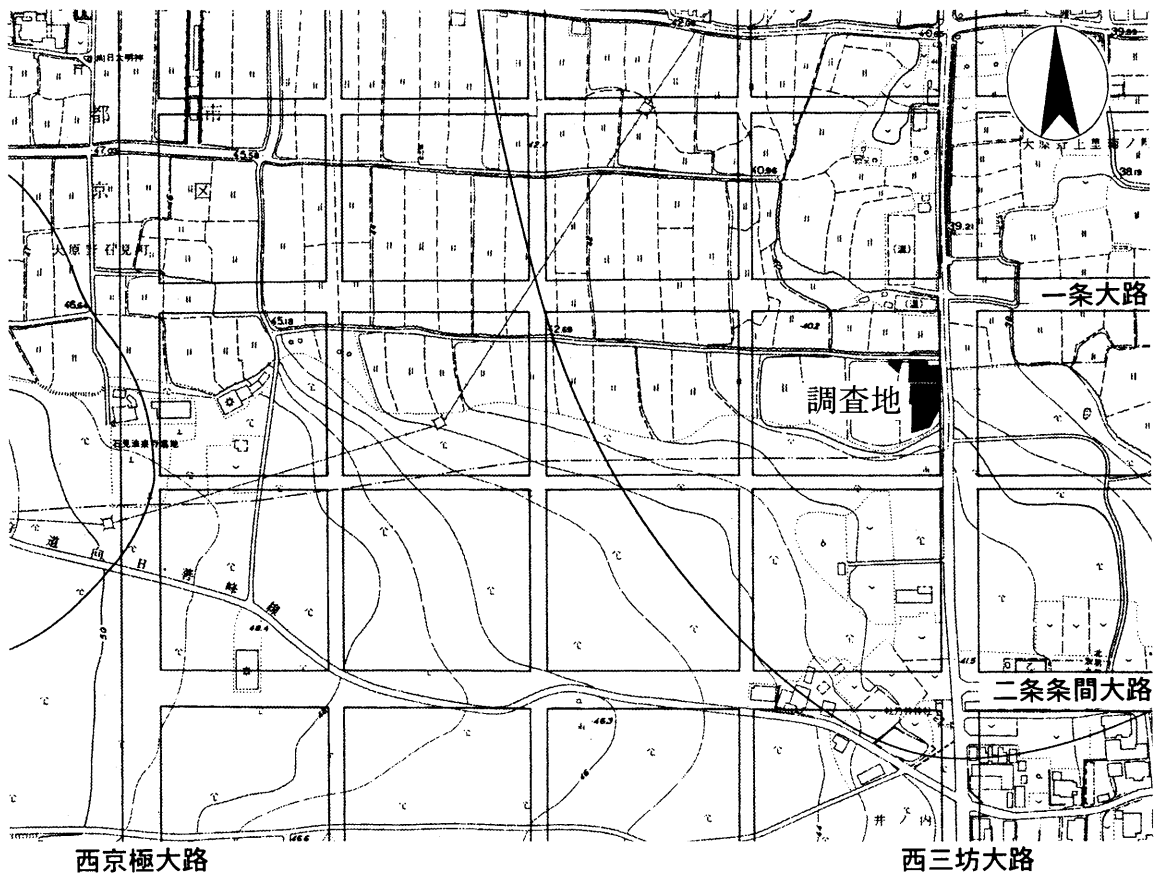
4 まとめ

今回の調査の大きな成果は、まず西三坊大路の位置が判明したことがあげられます。長岡京北西域の調査はこれまであまり実施されておらず、条坊が実際に施行されていたかどうか長い間不明でした。ところが、昨年度から継続してきた発掘調査で一条条間南小路と一条大路南側溝を発見し、長岡京の東西条坊路が宮域から西四坊域まで施行されていることが判明しました。今回の調査では、南北大路である西三坊大路の存在を明らかにすることができ、条坊復原を行なううえで貴重なデータを得ることができました。

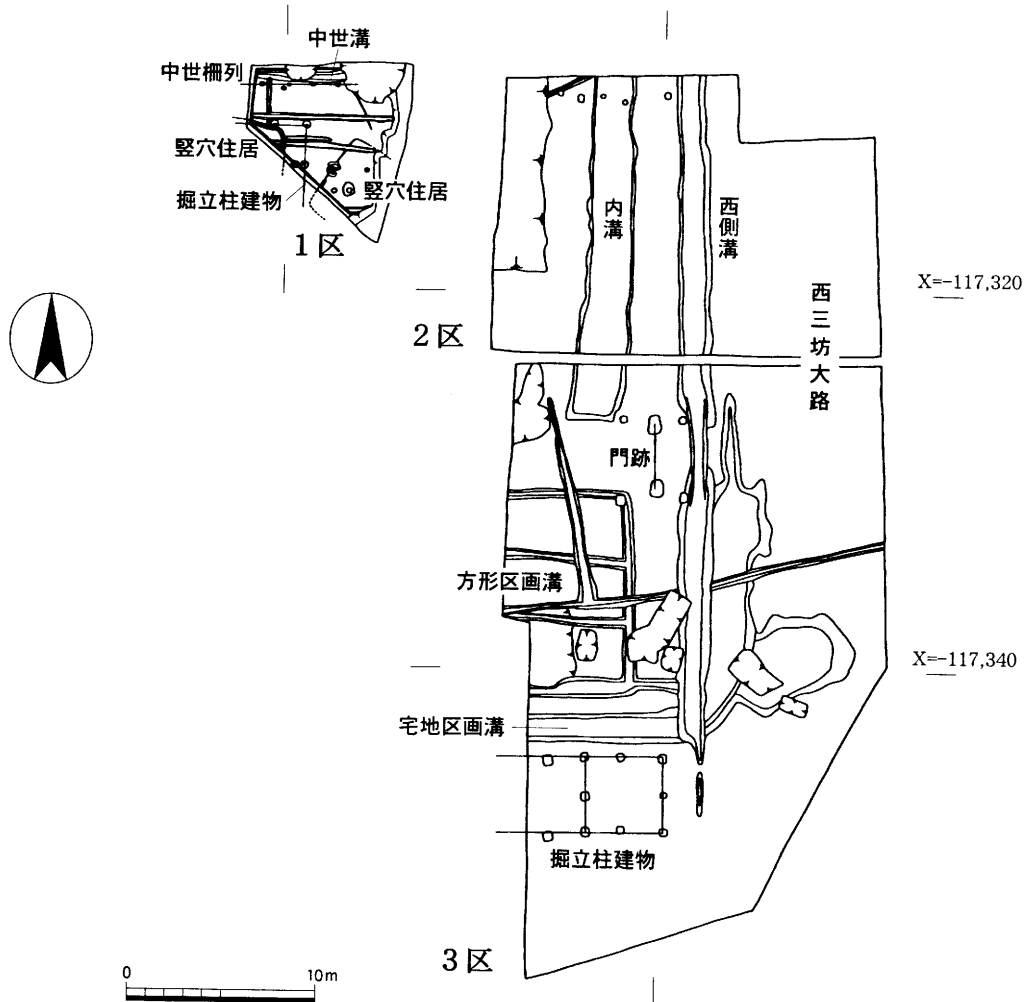
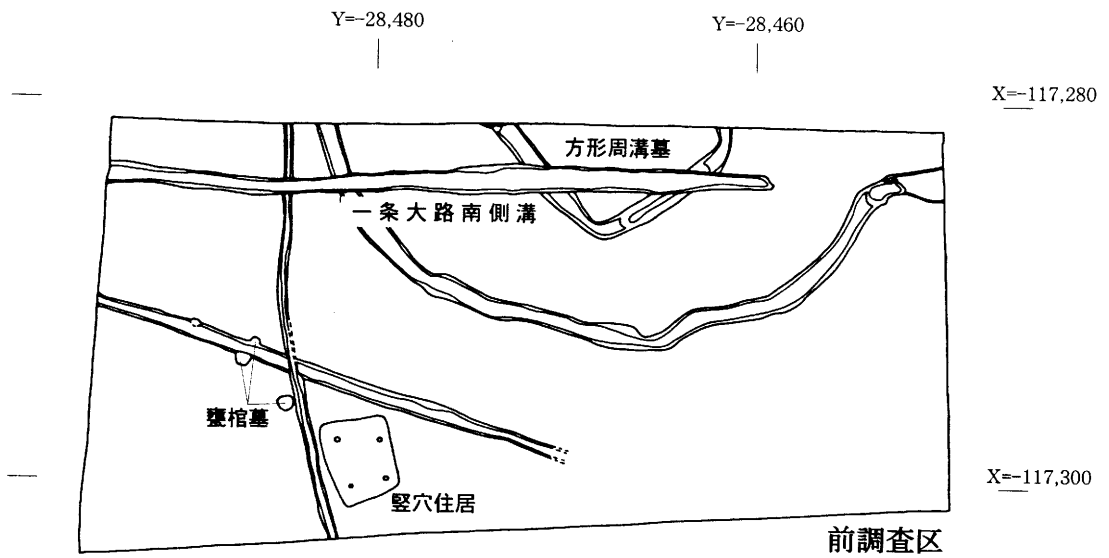
また、西三坊大路に開く門を発見したことも大きな成果です。門は初めは掘立柱構造の棟門でしたが、後に支柱をもつ門に建替えており、長岡京期を通じてここに大きな宅地が存在したことを示しています。伏見向日町線の調査でも一町域北西部あるいは八町域北東部で掘立柱建物や円形縦板組みの井戸を発見しており、この地域で条坊施行だけでなく宅地班給も行なわれたことが判明しました。『延喜式』によると、平安京では門を大路に面して建てられるのは三位以上の高級貴族だけです。長岡京期にこの規定が遡るかどうかわかりませんが、門の構造や建替えなどからある程度の身分を持つ人々がここに暮らしていたと考えられます。



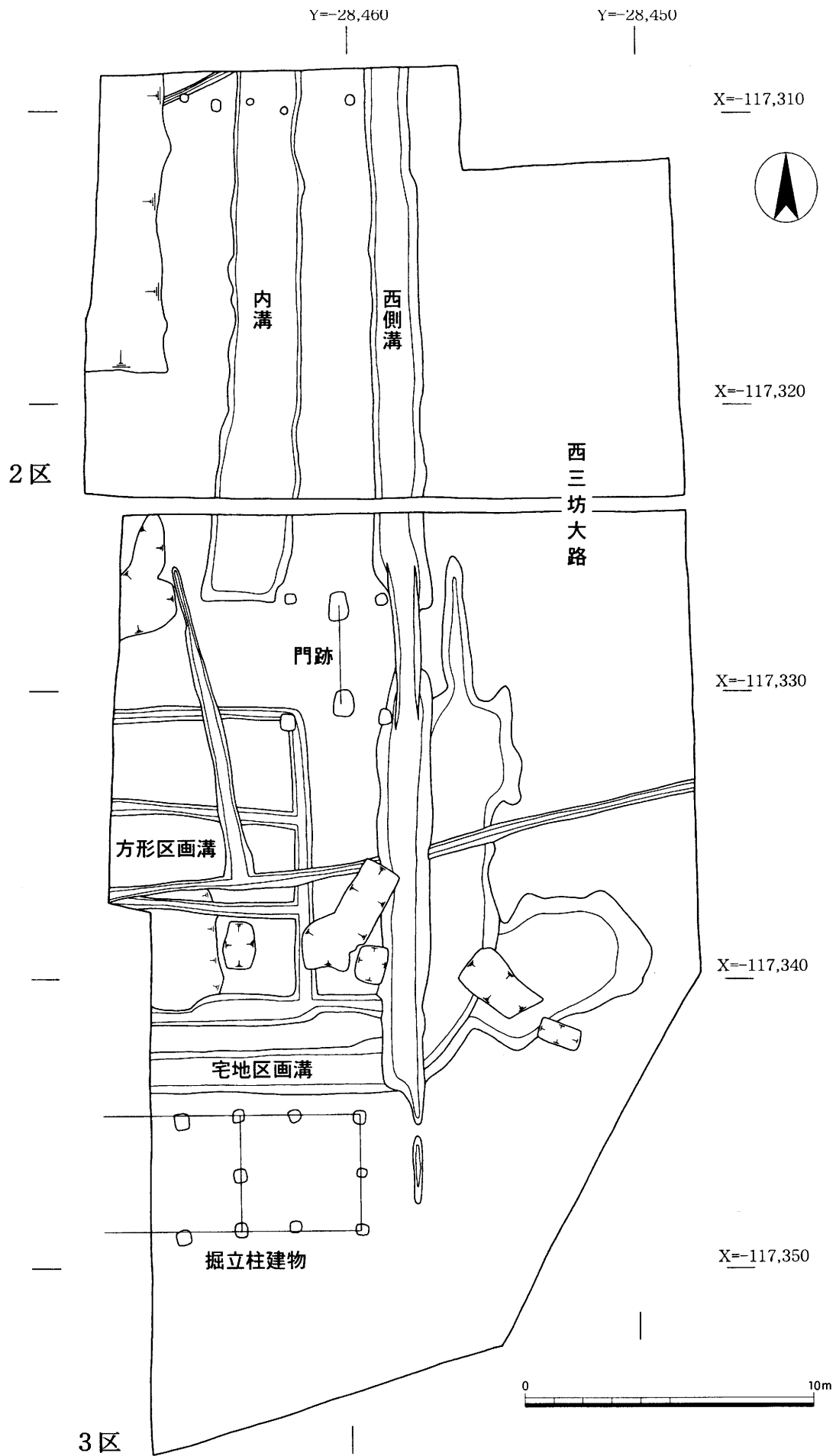
調査位置図



調査地周辺図 (1/5000)



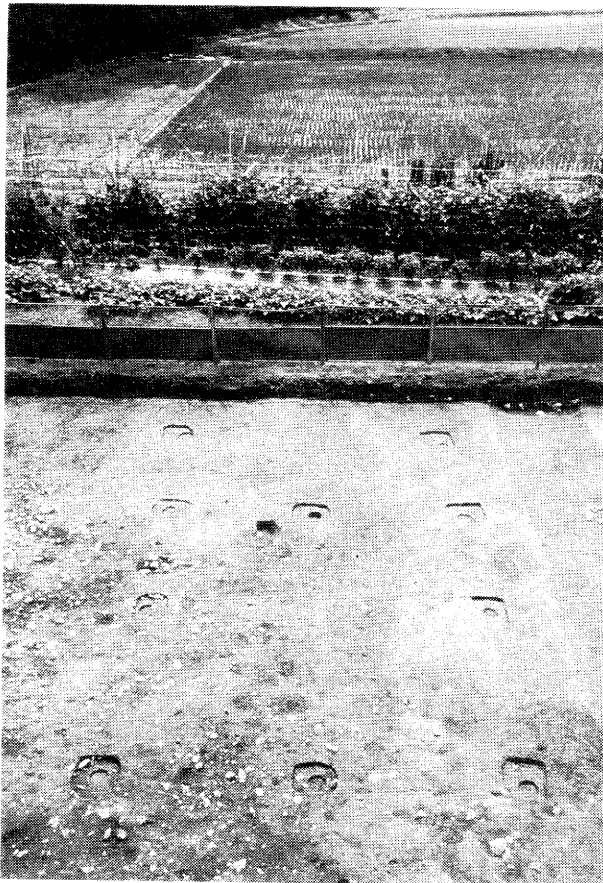
調査区全体図 (1/400)



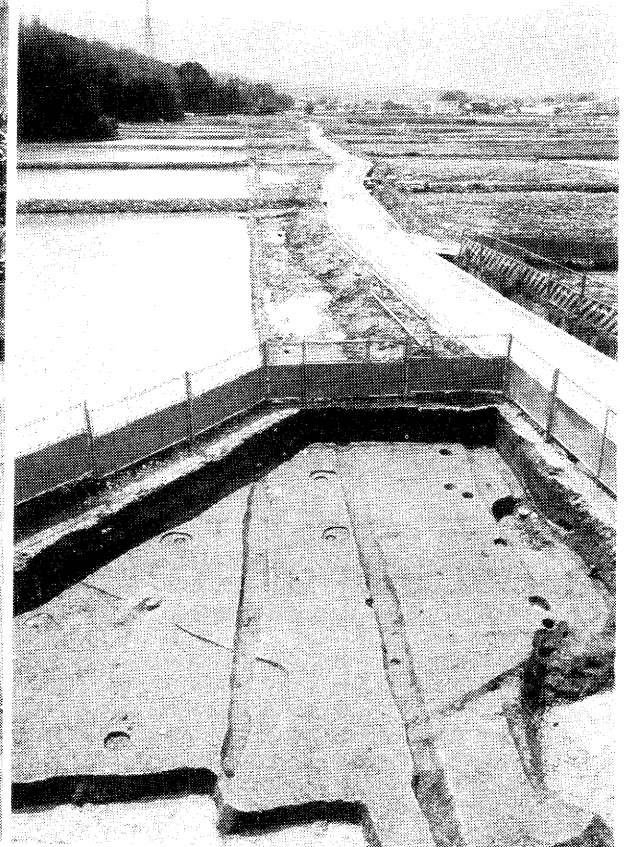
調査区 2・3区平面図 (1/200)



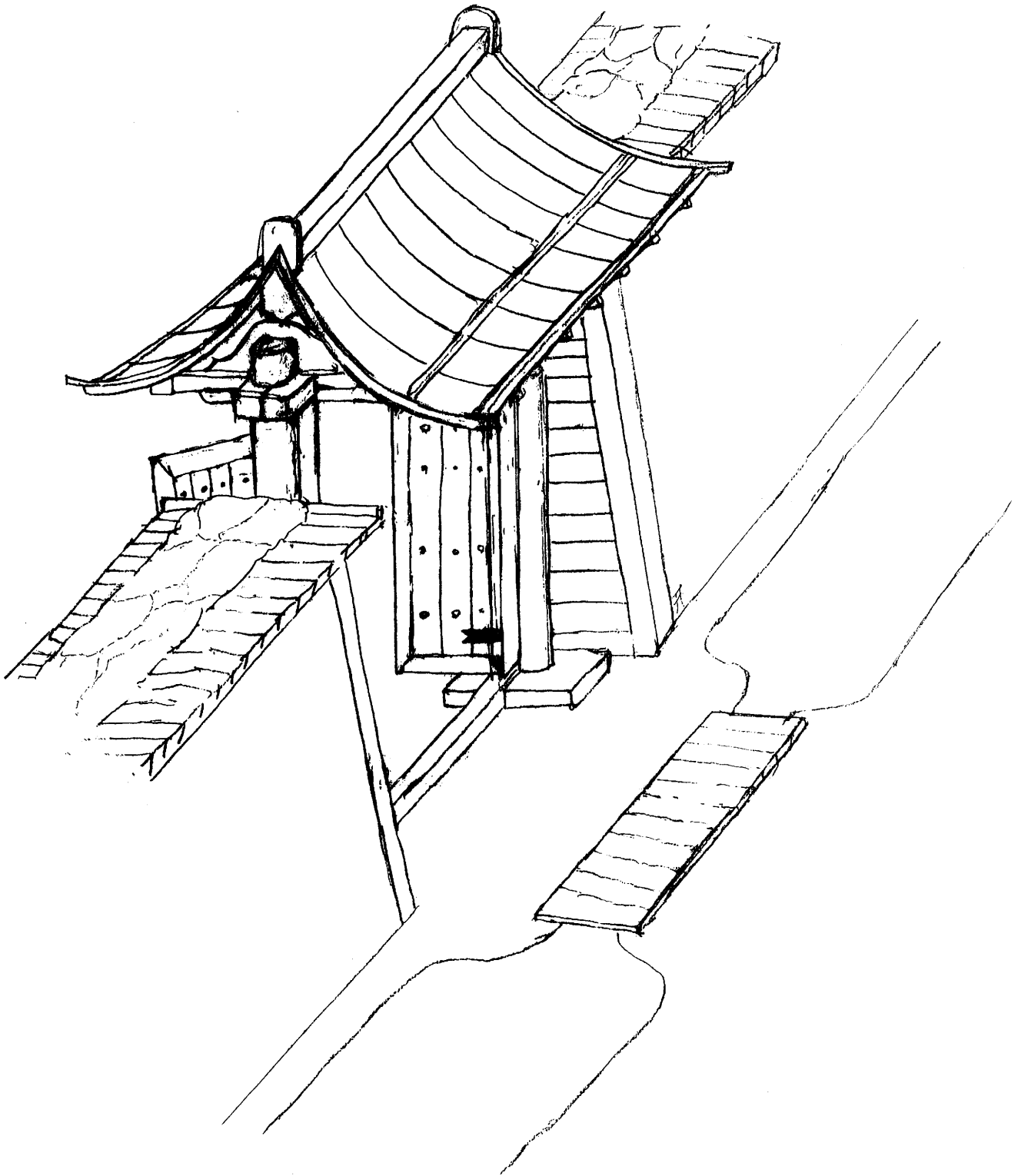
3区全景（北から）



掘立柱建物（東から）



1区全景（東から）



※門の復元にあたり、『絵巻物による「日本常民生絵引」第四巻』平凡社 1984年を参考にした

門概念図